

〈論文〉

初級日本語における 「お + 漢語」の扱い方について

小林 孝 郎

要 旨

「待遇性接頭辞」の「お」と「ご」とその使い分け方法については、従来から問題点の存在が指摘されてきた。おおかたの研究の示すところは、その使い分けの要諦を「お、ご」に後接する語彙情報に拠るとするもの（「語種原則」）であったが、そこで生じる問題として「お、ご」と後接する語種とのミスマッチをどのように説明するかという点があった。本稿はこれに対して、「お + 漢語」「ご + 和語」の問題を含めて研究史を概観し、学術的にも日本語教育分野においても「語種原則」が浸透している現状について考察した。次に、「語種原則」に代わる可能性を持つ新たな説明項を模索する研究潮流について論じた。そして、それらの説明項（本稿では「解釈要素」とした）を初級日本語教育に応用することが可能かどうかを日本語教科書の「漢語語彙」を実際に検証することで考察した。

キーワード：接頭辞, 漢語, 語種, ポライトネス, ウチソト

0. はじめに

接頭辞の「お、ご」の使い分けは、日本語学習者にとって習得の困難なハードルの一つと言われる。この問題の所在は、「お」と「ご」に後接して派生語を生成する、後部要素の「語基」の弁別を可能にする明快な回答

が提示されていないことによるが、かと言ってこの課題がこれまでまったく放置されてきたということではなく、研究史を紐解けば、戦前からの議論も積み重なり、現在に至っていることが分かる。しかし日本語教育の場に目を移すまでもなく、母語話者にとっても時に困惑を生み出す元にもなり得る言語事象である。

本稿では、研究史における論点を整理し、従来の説明項に代わる「解釈要素」を検証した後に、その初級日本語教育への応用も視野に検討していくこととする。

1. 先行研究

現在、「お、ご」の用法について、後述する辞・事典類や日本語教育解説書⁽¹⁾などに異論なくほぼ一致して取り上げられているのは、次のような事項である。

- 1) 和語接頭辞「お」には「和語」語彙が後接する
- 2) 漢語接頭辞「ご」には「漢語」語彙が後接する
- 3) 少数だが「お」に「漢語」が後接することがある。また、極めて少数だが「ご」に「和語」が後接することがある
- 4) 「お」と「ご」の両形に後接する語が確認されている

これらは、いずれも「接頭辞」と「語種」との関係性に重きを置いた記述であるが、本稿では、特に1) 2) を山田・奥瀬 (2013) に倣い「語種

(1) 例えば、東京 YMCA 日本語学校 (1992) には、「美化語」の解説の項に、〈お／御〉の使い分け〉として、「一般的に和語には『を』、漢語には『御』が付くが例外もある」と記され、例外 (漢語でも「お」が付くもの) に「お料理、お電話、お時間」を挙げている。

原則」と呼ぶことにする。

1.1 接頭辞「お、ご」に後接する「語種」をめぐって

接頭辞「お、ご」は、両者とも漢字「御」で表記される「待遇性接頭辞⁽²⁾」に類別されるが、それ自身が和語・漢語の別を持つように、後接する語に「語種」による制約がある。例えば、『日本語学研究事典』(2007)には、「接頭語」の項に

「お」と「ご」の使い分けが、「お酒、お年、お友達、お仲間」、「ご挨拶、ご自慢、ご立腹、ご令息」のように、基本的に結合相手の語種の相違にあることを考えると(ただし、「おビール」のような例もある)注目に値する。(p. 166)

との記述がある。

また日本語教育の分野においても、近藤・小森(2012)に、

「お」と「ご」の使い分けは、通常、「お+和語」(例「お名前」「お休み」「お顔」「お美しい」)、「ご+漢語」(例「ご家族」「ご住所」「ご出身」「ご立派」)となるが、「お電話番号」「お元気」「お食事」など、漢語の前でも「お」が好まれる例も多い。(p. 167)

との解説がある。なお、この引用の末尾の部分「『お電話番号』『お元気』『お食事』など、漢語の前でも『お』が好まれる例も多い」とあるのは、本稿で扱おうとしている語種原則の制約とは異なった語種の組み合わせ例である。

(2) 玉村(1985: 48)。

時代を遡れば、山田（1924⁽³⁾）、松下（1930⁽⁴⁾）らにもこの問題に言及した部分があるが、本格的な調査研究が始まるのは戦後しばらく経った後である。

柴田（1957）は、戦後の本格的な調査研究の起点であるが、アクセント辞典収録語を元に母語話者に「お、ご」の許容度を質問する調査を行ない、「お」につきにくい語⁽⁵⁾を中心に、後述する「おがよつく語」についても考察を行った。

新聞、雑誌の語彙調査⁽⁶⁾を元に「お、ご」がつく語について考察をした田中（1972）は、圧倒的に「お」がつく語が多いことや、「お、ご」両形につく語はそれほど多くないことについて「慣用的な限られた用法をのぞいては、「オ」が和語に、「ゴ」が漢語につくという傾向は、強く定着しているとみられる」と述べている（p.42）。「慣用的な限られた用法」とは、近藤・小森の「漢語の前でも『お』が好まれる例」と重なるものであろう。

-
- (3) 「御」といふ字を書いても「お」であるか「ご」であるかは下の語に由って定まるから読み方に迷う様な場合は殆ど無い。唯「御丈夫」「御立派」「御試験」など「お」「ご」両方にいふものも多少あるが、其れも前後の関係で大體は分かる。何となれば「お」は平易な語で「ご」は莊重な語であるからである。（pp. 375-376）
- (4) 「一、接頭辭にして敬意をあらはすものは次の數種なり。『お』名詞の上に冠することあり。」として、品詞別に語例を記載。語種についての記述はない。続けて「『ご』名詞の上に冠す。主として漢語のものにつく。（中略）副詞の上に冠するもの。これも主に漢語のものにつく」と、こちらは語種に触れている。なお副詞は『ご親切・ご丈夫・ご盛ん・ごゆっくり・ご尤も』の語例から現在の形容動詞と知れる。（pp. 22-24）
- (5) 外来語／「お」で始まる語／長い語／悪感情の語／色・自然に関する語（pp. 41-45）。
- (6) 国立国語研究所（1971）『電子計算機による新聞の語彙調査・Ⅱ』、同左（1962）『現代雑誌九十種の用語・用字』

このように、日本語の「お、ご」とその後接する語についてのこれまでの研究は、後接する語の「語種」の問題に焦点が当てられており、柴田、田中をはじめとした多くの実態調査⁽⁷⁾がこの説を支えてきたこともあって、「語種原則の有効性」(山田・奥瀬 2013)を疑う者はきわめて少数であった。

1.2 「お、ご」と初級日本語語彙について

中西(2012)は、日本語教育の立場からこのテーマに取り組み、「お、ご」と初級日本語語彙との関連を調べたものであるが、「日常語⁽⁸⁾」の中で接頭辞「お」が付く語を合計で384語抽出した。また、そのうち、「お」の付く「漢語」は43語⁽⁹⁾(以下、「中西リスト」と略述)である。「中西リスト」中の各語を、旧JLPT出題基準の級別、さらにモーラ数別に整理し〈表1〉に示す。

中西リストに記載されているのは、旧JLPT出題基準の「3,4級語彙」である。中西は、日常語1,500語の中で、接頭辞「お、ご」の付く語は442語で全体の約3割であるが、そのうち「お+漢語」の割合は1割に満たないことから、

これらの語は初級日本語学習者にとって、日常生活で多用されるも

(7) 既述の国立国語研究所調査の他に、文化庁による「国語に関する世論調査」(1997, 2006)、NHK「ことばのゆれ調査」など。直近の調査は滝島(2018)に詳しい。

(8) 中西(同上)では、国際交流基金(1994)『日本語能力試験出題基準【改訂版】』の「3,4級語彙(1,500語)」及び「あいさつ語等表現(32項目)」としている(p.28)。

(9) このほかに、「お」と「ご」双方が可能な語彙として「大切、返事」を挙げている。なお、論文内での「じゃま」の扱いが不統一だが、「あいさつ語」でもあり、本稿では考察対象には含めない。

表1 「お」の付く初級「漢語」リスト (中西 2010 : 28-34 より)

3級		4級			
2モーラ (4)	4モーラ (2)	1モーラ	3モーラ		
客 世話 (する) 留守 礼	正月 約束 (する) 大切 返事	茶	きれい (綺麗)	上手	教室
		2モーラ	元気	丈夫	玄関
		医者 椅子	紅茶 財布	しょうゆ 掃除 (する)	洗濯 (する) 人形
3モーラ (4)		菓子	砂糖	天気	勉強
支度 (する)		肉	散歩 (する)	電話	弁当
食事 (する)		ふろ	時間	布団	洋服
大事 野菜			写真 授業	帽子 料理	

のであり、接頭辞「お」が付く例外として教えるべきである (p. 34)

とした。日本語教育語彙に的を絞ってリスト化し導き出した主張であるが、基本的には「語種原則」を踏襲している。

しかし、「お+漢語」という点で言うと、無視できない数の例外を固定化しない、「語種原則」とは異なる新たな説明が求められていると思われる。

1.3 語種原則への疑問

山田・奥瀬 (2013) は、この「語種原則」による「お、ご」の使い分けに対して「語の出自という通時的概念に関わる『語種』という述語を用いては、共時的原理になりえず、説明概念としては不十分もしくは不適當である」(p. 223) とする根源的な問題提起を行った。さらに、「語種」による説明には方法論的に問題があり、共時的観点からの考察が必要であることを述べるとともに、語種原則の限界を次のように表現した。

現実の言語生活で、語種を意識・確認しながら オ- / ゴ- 選択するという状況はほぼ考えがたい。(例えば「お忙しい中申し訳ありませんが、ご確認お願いします。」という発話をするときに、“忙しい”は「和語」だからオ-、「確認」は「漢語」だからゴ-を付けよう”といったプロセスを踏んでいるだろうか? (p.227)

この根源的な問に的を射た解答を用意するのは容易ではないが、語種原則からは例外として扱われてきた、「お+漢語」形の生成を説明する新たな枠組みに手がかりが潜んでいるかもしれない。

本稿ではこの後、これまでに論究されてきた語種原則に代わる新たな説明方法を、研究史を辿って検討したのち、初級日本語教育への適用可能性について検討していくことにしたい。

2. 「お+漢語」について

2.1 語の成立プロセス要因

中西 (1993) は、「語種原則」同様の通時的観点ではあるが、「お」に後接する漢語の成り立ちを検証し、和製漢語には「お」が後接することを述べた⁽¹⁰⁾。この方法は、学術的には検討されてしかるべきものだが、漢語と和製漢語の判別、「お」の後接しない和製漢語⁽¹¹⁾についての新たな位置づけが必要となることもあり、教育の視点からは今後整理が必要となろう。

(10) 「お+漢語」の形式で使われる漢語を「真に例外とすべきもの(肉、茶、紅茶、時間、醤油)」「和製の漢語(愛想、菓子、行儀、辞儀、受験、食事、世辞、世話、洗濯、葬式、電話、荷物、人形、風呂、便所、弁当、味噌)」「日中語間で用法の違うもの(礼、上品、勉強、料理)」に3分類している。(p.140)

(11) 例えば、出席、心配、想像、責任など。

2.2 後接語の意味範囲

柴田 (1957) は、前述したように「お」と語種の問題として、外来語には非外来語よりも「お」がつきにくいことを述べているが、「語種原則」に関する言及はなく、「お+漢語」形を特に意識してはいないものと思われる⁽¹²⁾。同時に、語の意味範囲を基に、「お」のつきやすい例として、a) 食事 (例: 醤油) b) 心の働き (例: 気の毒) c) 身体の働き (例: 病気) の3項目を挙げている (検討過程ではそれ以外に「家の道具/食するもの/感情」などの項目も) が、「お」のつきやすいとされる語例には「手伝、知らせ」などの和語が含まれていたり、b) c) のようにカテゴリー化するには無理のあるものも見受けられる⁽¹³⁾。

西隈 (2004) は、「語種原則」を述べたのち「お+漢語」形について、「お茶、お菓子、お豆腐、お味噌」の例を挙げ、「漢語のうち飲食に関するもの (まれに外来語にも付く)」に「お」が用いられると述べ、「おビール、お紅茶」なども「飲み物であるからだ」とした。ただし、「お天気、お電話」などについては「慣用」としている。

「お+漢語」形の問題に、語の意味範囲による説明を本格的に用いたのは堀尾 (2010) である。堀尾は、「仮説」として〈漢語であっても、モノであれば「お」が付く〉を立て、「和語には『お』漢語には『ご』を付ける」という「基本のルール」に当てはまらない語彙のうち、「モノ」の定義⁽¹⁴⁾を満たす語彙を諸種のメディアから収集した。〈表2〉は、堀尾がま

(12) 山田・奥瀬 (2013: 227) など。本稿 89 ページに引用あり。

(13) 柴田 (同上) ではまた、「お」についての先行研究のうち、三宅 (1944) の「食事に関する語にはよくつく」、今泉 (1955) の「魚の名・花の名にはつきにくい」という見方が紹介されている。

(14) 「形のある物体を初めとして、広く人間が知覚し思考し得る対象の一切を意味する。「こと (事)」が時間的に生起・消滅する現象を表すのに対して、「もの」はその現象を担う不変な実体を想定して用いる語」としている (p. 63)。

とめた「モノ」の下位分類と語例である。

表2 モノに「お」を付ける語彙

カテゴリー	モノを表す語彙の特徴	例
金銭	お金に関する語彙	お賽銭・おこづかい・お通帳
装飾	服装や体につけるもの、ファッション	お鏡・お鞆・お扇子
家	家や家の間取りなどに関する語彙	お宅・お座敷・お二階
食器	食べ物を作る・食べる際に使う道具	お杓文字・お皿・お玉
祭礼	儀式や慣例、行事などに関するもの	お数珠・お中元・お土産
通信	通信に使用する道具	お電話・お手紙・お葉書
その他	上記の8つのカテゴリー以外のモノ	おタオル・お注射

※ 堀尾 (2010: 64) より転載

堀尾が上述の定義に従って収集した語数は113語であるが、そこから「お」に後接する「漢語」44語（以下、「堀尾リスト」と略述）を抽出した。堀尾リストをモーラ数別にまとめたのが〈表3〉である（語彙の表記は原文のまま）。

表3 堀尾 (2010) の「お」に後接する「漢語」リスト

2モーラ (11)	3モーラ (20)		4モーラ (13)	
匙	急須	駄賃	給金	人形
札	化粧	茶碗	給料	洋服
数珠	月謝	電話	玄関	
席	財布	道具	香典	
代	時給	時計	賽銭	
宅	写真	二階	座席	
ちょこ	杓文字	布巾	餞別	
鉢	祝儀	布団	雑巾	
布施	歳暮	帽子	中元	
盆	扇子		注射	
わん	太鼓		通帳	

※同上 p. 65, 注12より

堀尾は、「基本的に和語には『お』，漢語には『ご』をつける。モノの語彙の場合は「お」が付けられるが，規則からの逸脱ではない」(p. 70)として「語種原則」の修正を主張し「返事，会計」の分析時には、「敬意の方向」「動作主」の概念を援用している。「語種原則」を踏まえつつも、「お+漢語」の共時的説明項として、「モノ」性という概念を用意したものである⁽¹⁵⁾。

2.3 後接語の機能・ウチソト・言語内的要因

菊池(1994)は、「語種原則」を承認した上で，部分的にはあるが、「機能」という概念を取り入れて以下のように述べている。

「お」か「ご」かで〈機能〉を区別する傾向のある語も，稀にある。「ご返事」「お返事」は，前者が尊敬語・謙讓語A，後者が美化語(たとえば幼稚園言葉)という使い分けの傾向が，かなり認められそうである。(pp. 385-386)

しかし「機能」の視点は，両接頭辞に後接可能な「病気，誕生，気分」などの語の場合はともかく，「お」に後接できる／できない語の選択という新たな問題が生じる。

西隈(2004)は，「お+漢語」形の2つ目の要素として，「漢語のうち「相手の所有物」を指す場合には「お」使用の傾向がある」と論じている。「お時間，お返事，お宅」などがその具体例である⁽¹⁶⁾。また，「フォーマリ

(15) この他に堀尾は，「お/ご+返事」の使い分けに「動作主」と「敬意の対象」という要素を用いた説明を加えている。

(16) 反例となる「ご+漢語」については，「ご住所，ご両親」を挙げ「所有というよりも所在」であるからとしている。

ティー⁽¹⁷⁾」概念を用いて「ご返事」「お返事」の違いも述べた。西隈が用いた「所有, フォーマリティー」などの概念は、後述する山田・奥瀬の分析にも通じるだけではなく、母語話者の「お, ご」選択の判断基準に近いものに思える。また、この点は、日本の言語文化の基本構造との関連も想定され、日本語の特徴とされる「ウチソト」体系の指標⁽¹⁸⁾に加えることも可能となるかもしれない。

宮田 (2005)⁽¹⁹⁾ は、「お」「ご」に後接する要因を検討し、a) 語種 b) 拍数 c) 音韻的要因 d) 形態的動作性の有無の4項の「言語内的要因」について述べた⁽²⁰⁾ (p. 31)。その結果、「お」に後接しやすいのは「お以外で始まり形態動作性を持つ3拍語の和語及び混種語」であり、「ご」に後接しやすいのは「ご以外で始まり形態的動作性を持つ4拍の漢語」であるとしている (p. 116)。

山田・奥瀬 (2013) は、「お, ご」両用の語の分析を主としたものだが、まず柴田、宮田について、以下のように述べる。

柴田 (1957) も宮田 (2005) も、敬語接辞が前接できるかどうかについて、後部要素 (語基) の性質の諸要素によって条件化できるといふ予想の下、様々な条件 (変数) を仮設し、その有効性を検証しようとしたものであろうが、その変数設定自体が、敬語の特質である対人

(17) 形式的であるかどうかの度合い。「お返事は？」は母親が答えない子どもに、「ご返事をお待ちしております」は上司やビジネス相手に用いる、という例を挙げている (p. 33)。

(18) 本稿では、これ以上は立ち入らない。ウチソトの視点から「は, が」「の, こと」などを分析している牧野 (1996) を参照されたい。

(19) 日本語教育語彙リストの一つである「国際交流基金 (2002)」に収録されている JLP T1 級名詞語彙を「お, ご」に後接させた時の自然さについて、日本語母語話者の判断を求めたものである。

(20) 「言語外的要因」である男女別の傾向分析も行っている。

関係の問題を離れて、ほぼ形態論レベルでの解決を探っている点に疑問を感じる。しかし、いずれにせよ、柴田（1957）は、そもそもオ／ゴ選択自体を（おそらく暗黙の前提として）問題としておらず、宮田（2005）は語種原則を第一に認めているように、語種原則を最も大きな要因とする点に変わりはない。（pp. 226-227, 下線は筆者）

この山田・奥瀬の言辞の背景には、「お、ご」の使い分けという「共時的言語状態」を説明する上で、通時的概念である「語種」を用いて説明するという方法論を疑問視する理論的な立場がある。その理論とは、「ポライトネス理論」を基にした「距離」の視点である。例えば「お返事」「ご返事」の分析では、話者の判断で「距離の近い人」「距離の遠い人」の場合に使用されるとした。その上で、この「距離」標示機能は「お、ご」ではなく、「語基」自体が持つものであると述べ、「友人／友だち、職業／仕事」などの類義語ペアの使い分けをはじめ、多くの語彙分析に適用できる可能性について論じた。西隈同様に「ウチソト」体系との親和性を思わせる記述である。

2.4 「語種原則」以外の解釈要素

ここでは、次節以降の検討資料とするため、「お+漢語」を例外として処理した「語種原則」に換わり得る解釈要素を取り上げた「お+漢語」の説明項について整理をする。以下、1) 2) は解釈の対象を、①～⑦は説明項とする解釈要素を、() 内には論者名を記す。なお西隈、堀尾は複数の説明項を持つので、それぞれに abc 記号を付して区別した。

1) 接頭辞「お、ご」

- ① 「お」と「ご」の機能（菊池, 堀尾 a）
- ② フォーマリティー（西隈 a）

2) 後接する語基

- ③ 和製漢語 (中西)
- ④ カテゴリー (柴田, 西隈 b, 堀尾 b)
- ⑤ 形態的動作性 (宮田)
- ⑥ 所有 (西隈 c)
- ⑦ 距離 (山田・奥瀬)

接頭辞「お」を解釈対象としたのは、①②である。ただし、これは「お、ご」の両接頭辞の使用が可能な後接語にのみ適用されるものである。

これに対して、後接語の語基のさまざまな意味特性を解釈の対象としたものが③～⑦である。

中西による③は、通時的観点ではあるがその有効性を確認する必要がある。語の意味範囲を指標にした柴田, 西隈 b, 堀尾 b の 3 者の議論では、堀尾 b の「モノ」に加えて、「食品」をプラスすることで重複を避けてまとめることができる。本稿ではこの「モノ」系列の意味範囲を説明項とする場合を④「カテゴリー」と呼ぶことにした。

宮田は言語内的要因として 4 項目を挙げたが、そのうちの「拍数」は、「お、ご」で解釈要素とするほどの明示的な差は見られず、「音韻」も後接語基の頭音が「お、ご」の場合のみに通用する限定的なものなので除外すると、解釈要素としては⑤の「形態的動作性」が選択される。

西隈 c の「所有, (フォーマリティー)」, 山田・奥瀬の「距離」の機能は、空間概念を基本とする日本語のウチソト体系の一部を成すものと捉えられるが、ここでは、それぞれ独立した解釈要素として⑥「所有」, ⑦「距離」を選択した。なお、⑥の場合は、後接する語基部分に「お」が付くと相手の所有となるもので話者側には属さないものという基準を用い、

⑦では、対になる「ご」のつく漢語の存否⁽²¹⁾と「生活に密着した語」に属するかどうか⁽²²⁾を基準とした。

本稿は、日本語教育の初級段階で「お+漢語」の学習を、「例外」としての取り扱い以外にどのような解釈要素の適用が可能かつ妥当かを、初級語彙を対象に、上の③～⑦の解釈要素について、適用の可否を検討することを目的としているが、実際の検証は、後述の「3.2 解釈要素適用の適否」において行うことにする。

3. 「お+漢語」の解釈について

3.1 「大地」の漢語リスト

本節では、日本語教育の実践面で、先行研究でなされた「お+漢語」の解釈要素の適用が可能かどうかについて、初級教科書に用いられている名詞（サ変動詞語基、形容動詞を含む）を基に考察する。

対象とする教科書は、『日本語初級①大地』及び『日本語初級②大地』（以下、「大地」と略述）とする。同教科書の総語彙数は異なり語数で約1,900語で、中西（2012）が選定した1,500語より25%ほど多いが、「お」の付く漢語は、〈表4〉に示す37語⁽²³⁾である。この漢語の数は、上述の中西リストと比べて、数の上で遜色はない。

また中西リストと所屬語の比較をすると、中西リスト側には8語、大地側には5語、相手リストには属さない漢語が見られたが、いずれも初級では関連語彙として扱われるものであることから、ここでは「大地」のリストを対象を絞ることにする。

(21) pp. 237-8。

(22) p. 239

(23) 「あいさつことば」「親族名称」は含めない。

表4 「大地」における「お」に後接する漢語

2		3	4	5	6	7	8
砂糖 しょうゆ 肉	紅茶 財布	茶教室	弁当 野菜料理	相撲(さん) 風呂 勉強	食事	きれい 元気 写真	椅子
9		12	13	16	19	20	21
教師 散歩 洗濯	掃除 天気 約束	授業	布団	菓子	医者(さん) 大事に	帽子	調子
22	23	32	39	42	まとめ		
世話 人形	丈夫	面	留守	宅	客(さん)		

注1 数字は各漢語語彙の導入課を表す。

3.2 解釈要素適用の適否

「大地」の37語について、「お+漢語」形を語基部分の特性を対象とした前述の解釈要素③～⑦について適用の可否を検討し、〈表5〉に示した⁽²⁴⁾。なお、「解釈率」は、5つの解釈要素の適用が可能な語数の37語に占める割合を表す。

事前に予想していたことではあったが、すべてにわたってカバーできる「解釈要素」は認められなかった。解釈要素としてもっとも高い割合を示したのは「距離」の68.4% (26語)であった。「カテゴリー」「形態的動作的性」が続くが、いずれも解釈率は50%に届かない。

また、今回のどの解釈要素によってもカバーできなかったものは、「相撲(さん)」、医者(さん)、大事、調子、客」の5語であった。

そこでこの5語を除いて、解釈可能な要素の使用を最小限に抑えた組み合わせを検討したところ、仮に「距離(26語)」に加えて「カテゴリー

(24) 表中には、試みに「和製漢語」も含めた。

表5 「大地」37語の解釈要素の可否

要素\漢語	砂糖	しょうゆ	肉	紅茶	財布	茶	教室	弁当
③和製漢語	-	-	-	-	-	-	-	○
④カテゴリー	○	○	○	○	○	○	-	○
⑤形態的動作性	-	-	-	-	-	-	-	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	-	-
⑦距離	○	○	○	○	○	○	○	○
要素\漢語	野菜	料理	相撲(さん)	風呂	勉強	食事	きれい	元気
③和製漢語	-	-	-	○	-	○	-	-
④カテゴリー	○	○	-	○	-	○	-	-
⑤形態的動作性	-	○	-	-	○	○	-	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	○	○
⑦距離	○	○	-	○	○	○	-	○
要素\漢語	写真	椅子	散歩	洗濯	掃除	天気	約束	授業
③和製漢語	-	-	-	○	-	-	-	-
④カテゴリー	○	○	-	-	-	-	-	-
⑤形態的動作性	○	-	○	○	○	-	○	○
⑥所有	○	-	-	-	-	-	-	○
⑦距離	○	○	○	○	○	○*	○	○*
要素\漢語	布団	菓子	医者(さん)	大事(に)	帽子	調子	世話	人形
③和製漢語	-	○	-	-	-	-	○	○
④カテゴリー	○	○	-	-	○	-	-	○
⑤形態的動作性	-	-	-	-	-	-	○	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	-	-
⑦距離	○	○	-	-	○	-	○	-
要素\漢語	丈夫	面	留守	宅	客(さん)	可(○)の計	解釈率	
③和製漢語	-	-	-	-	-	6	15.8%	
④カテゴリー	-	○	-	○	-	18	47.4%	
⑤形態的動作性	-	-	○	-	-	10	26.3%	
⑥所有	○	-	○	○	-	6	15.8%	
⑦距離	-	-	○*	-	-	26	68.4%	

※ ○は可を示す

※ ⑦の「○*」は対語が想定できるもの⁽²⁵⁾

(18語)「相手の所有物(6語)」を解釈要素にすると、100%の解釈率を得ることが分かった。「解釈要素」ではカバー仕切れなかった「相撲(さん)、医者(さん)、大事、調子、客」の5語のうち「相撲、医者、客」については、「人物の役割⁽²⁶⁾」のような意味範囲を設定することも可能であ

(25) 天気/天候、授業/講義、留守/不在

(26) 本稿執筆の過程で匿名の査読者からいただいた示唆を元に、着想したものである。記して感謝申し上げる。

ろう。「大事, 調子」についても調査語彙を増やすことで, 何らかの解釈要素が設定できるのではないかとも考える。

4. まとめ

これまで「お+漢語」への疑問に対して「例外」「慣用」という解説がなされてきたが, 時に歯切れの悪さや茫とした気分を抱かせるものであった。これに対して, 近年の研究の中には, 「例外」を含めた「語種原則」に代わる説明項を用意しようとするものが現れてきており, 本稿では, そうした潮流に注目して論題として取り上げた。さらに, それらの研究成果と日本語教育との接点についても検討したが, 汎用性を求めるという点では, 十分なものとは言えない。

日本語教育現場において「お+漢語」の説明を, 語種原則の「例外」という従来の見方に縛られずに, 「解釈要素」の再検討を通して, 今後新たな方向性を模索していきたいと考える。

参考文献

- 今泉忠義 (1955) 「日本の敬語」『講座日本語』2, 大月書店, pp. 146-158
菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店
国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
近藤安月子・小森和子 (2012) 『研究社日本語教育事典』研究社
柴田武 (1957) 「お」の付く語・付かない語」『言語生活』70, pp. 40-49
滝島雅子 (2018) 「放送における美化語の意識調査——視聴者とアナウンサーの双方へのインタビュー調査から——」『ことばの研究』NHK 放送文化研究所 (<https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/index.html?p=> 研究論文・報告)
田中章夫 (1972) 「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば」『国文学解釈と鑑賞』5月臨時増刊号, pp. 40-45
玉村文郎 (1985) 『語彙の研究と教育 (下)』国立国語研究所
東京 YMCA 日本語学校 (1992) 『入門日本語教授法』創拓社

- 中西泰洋 (1993) 「接頭辞「お」と「ご」について」『大阪千代田短期大学紀要』
24, pp. 131-142
- 同上 (2012) 「初級日本語の語彙に付く接頭辞「お」と「ご」について」『神戸
大学留学生センター紀要』18, pp. 27-36
- 西隈俊哉 (2004) 「『お』と『ご』の使い分け」『月刊日本語』11月号, アルク
- 服部匡 (2018) 「敬語接頭辞異形「お〜」「ご〜」両者の用例のある語について」
『言語資源活用ワークショップ2018 発表論文集 (Web 公開版)』国立国語
研究所
- 飛田良文編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 堀尾佳以 (2010) 「御(お)と御(ご)の統語的特徴——「お電話」「お時給」は
なぜ「お」か——」『人間科学研究』6, 北見工業大学, 59-71
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』アルク
- 松下大三郎 (1930) 『増補改訂 標準日本口語法』勉誠社
- 三宅武郎 (1944) 『現代敬語法』日本語教育振興会
- 宮田剛章 (2005) 「『お』か『ご』か? 日本語母語話者による名詞の敬語化——
日本語能力試験の語彙から——」『計量国語学』25-3, 計量国語学会, 103-
122
- 山田健三・奥瀬真紀 (2014) 「敬語接頭辞「オ- / ゴ- (御)」の使い分け原理試
論——ポライトネス理論の観点から——」『信州大学人文科学論集』47,
223-241
- 山田孝雄 (1924) 『敬語法の研究』東京寶文館

(原稿受付 2020年10月31日)